

# 津城寛文著『折口信夫の鎮魂論—研究史的位相と歌人の身体感覚』

春秋社、1990年9月刊行

松岡秀明

「境界」という概念は、近年人文諸科学において重要な概念の一つとなっており、周知のようになさまざまな領域で活発に論じられている。しかし本書の鍵概念である「身体境界」は、文化人類学や社会学ではなく精神医学および臨床心理学で用いられてきた概念であり、本書が問題にするのは集団ないし社会における境界ではなく、個人と外部との間の境界である。すなわち、本書は折口信夫・釈道空という個人の身体境界感覚を理解しようとするものである。以上のような点を考えてみると、本書が独自の位置を占めることが理解されよう。

著者津城寛文氏は予て鎮魂について研究をすすめており、本書に先行して姉妹篇ともいべき『鎮魂行法論—近代神道世界と靈魂論と身体論』（春秋社、90年4月、以下『行法論』）を著している。津城氏は既に『行法論』で、身体境界概念を用いて大本系、川面凡児、田中治吾平、宮地敲夫の鎮魂行法を論じているが（『行法論』、第7章「鎮魂行法の身体論とその類型化—宗教的身体境界の観点から」）、本書、津城氏独自の概念である「透過的身体境界」を用いて、折口信夫の鎮魂論と釈道空短歌の同一基盤の探求を試みた意欲作である。

## 1. 「透明な理解」の可能性

序論において津城氏は、折口理解のための最も重要なキーワードは「まれびと」や「常世」ではなく「鎮魂」であると述べたうえで、鎮魂についてはこれまで十分に論じられてこなかったと指摘する。本書全体の動機の一つであるこの問題提起は、非常に重要である。ひとつの思想が豊かなものとなるに従って、ほとんどの場合にその思想の内さまさまな

矛盾が生じてくる。そして、後から来た者たちがその思想を全体として顧みることなしに部分部分を恣意的に用いることはままあることであり、結果としてその思想自体が曲解される可能性がある。折口の思想もまた、その例にもれない。このような色付けられた理解に対して、津城氏が意図するのは折口鎮魂論の全体像の「透明な理解」なのである。

序論以下の構成は、本書の副題に端的にあらわされている。すなわち第Ⅰ部「鎮魂の研究史」が「研究史的位相」の解明に充てられ、第Ⅱ部「折口鎮魂論の発生」では「歌人の身体感覚」が探求される。第Ⅰ部で津城氏は、鎮魂という大きな概念をいくつかの下位概念に分かとうとする。以下、第Ⅰ部の各章を簡単にみていくことにしたい。

最初の二つの章では、折口の鎮魂論自体が敷衍され分析される。第1章「折口信夫の鎮魂説—その透明な理解のために」では折口鎮魂論の解説がなされている。まず、折口に先行する伴信友と鈴木重胤の鎮魂論が示されるが、これまでほとんど指摘されていなかったという鈴木重胤の鎮魂説と折口のそれとの相似についての言及は、著者が自負するように学説史上の貢献と思われる。それに続いて、産霊（むすび）は信仰で鎮魂は呪術であるという折口の一節を導きの糸として、産霊と鎮魂の区別を明確に提示する手並は鮮やかである。折口は、靈魂を身体に附着させたり、体内で増殖あるいは分割させ外に出すという神の技術を産霊、人間的動作によって産霊の技術を惹起する呪術的技術を鎮魂と捉えていたというのである。そして、著者は折口における鎮魂は以下の4類型に分けられるとする。

「靈触り」類型Ⅰ：芸能によって魂を被術

者の体内に入れる、「靈殖ゆ」類型：自分の増殖魂を分割して被術者に与える、「靈鎮め」類型：体内に入った魂を安定させる、「靈触る」類型Ⅱ：魂の受け手が自ら外来魂摂取のために何らかの行為をする。

第2章「天皇靈の鎮魂」では折口の天皇靈鎮魂論が分析されるが、ここでも非常に興味深い指摘がなされている。折口は天皇靈を稻魂（穀靈）でもなく国魂でもなく、皇祖神の言靈であると考えていたという指摘がそれである。また、天皇靈を身体外に出して聖所に祀るという折口の独特の発想が明らかにされている。

これに対して第3章および第4章は、折口鎮魂論を間接的に論じる。第3章「鎮魂の研究史—折口鎮魂説の前後左右」では、折口を中心に鎮魂を論じる研究者が三つのグループに整理される。ここでは、(1)折口の同時代人として中山太郎、三品影英など、(2)折口の強い影響を受けた論者として西角井正慶、吉田義孝、岡田清司、西郷信綱など、(3)折口以降の研究者で折口の影響がほとんど認められないものとして真弓常忠、副島知一などが採り上げられ、それぞれの所説が検討されている。このような作業を通して折口の独創性が浮き彫りにされていく。一方、第4章「鎮魂の類型—靈魂操作の諸技法」では、第3章を受けて鎮魂の類型化が行なわれる。津城氏は「靈魂の操作にかかわる呪術的儀礼的行為」と定義し、個人的／団体的、呪術的／儀礼的、魂の不動／移動、日常維持的／脱日常的の4組の対立概念を用いることにより諸研究者の説く「鎮魂」を5つの類型に分けている。

以上のように、第Ⅰ部では津城氏のいう「透明な理解」を目指して、徹底したテキストの読み込みが行なわれているのであり、その目的は十分に達成されていると思われる。折口の語り口を丁寧に読み取っていこうというこのようなアプローチに対して、類型化の作業に過ぎないという批判もあり得るであろう<sup>(1)</sup>。しかしながら、魅力的ではあるが漠

然とした概念をさまざまな下位概念に類型化し整理するという作業を通して、折口鎮魂論全体の輪郭が鮮明なものとなってきているのである。第Ⅰ部で示された粘り強い真摯な学術的態度は高く評価されるべきであろう。

こうした「透明な理解」にもとづいたうえで、第Ⅱ部の主題と関連したたとえば以下のような問いかけがなされている。

折口が生理心理的に体験した「異常」な身体感覚が、彼の鎮魂説の発生と発想をかなり強く促したのではないか (p.61)

「靈魂の容れ物」としての身体の安全性に対する不安が濃密に漂っているように推察はされる。(p.86)

## 2. 不安と癒し

このような問いを受けて、津城氏は第Ⅱ部では生理心理的なアプローチを採って「折口鎮魂節と遥空短歌とが発生してきた同一の基盤」を明らかにしようとする。その作業を行なう際に津城氏が用いるのは既に示したように「身体境界」であるが、その概念規定は第5章「折口信夫の透過的身体境界感覚—折口鎮魂節と遥空短歌の発生基盤」第1節でなされている。それによれば、(1)身体境界の定位は肉体表面とは独立に、内外に縮小・拡大する、(2)内界からの漏出物、外界からの侵入物に対抗する、(3)「内から外へ」「外から内へ」という身体境界の逆方向の破れ方は、健常者では状況に応じて交替するが、病的な場合には排他的に対立する。すなわち、身体境界とはあくまで心理学的な分析概念なのである。身体境界を「外から内へ」透過する存在としては、心理的作用を及ぼすもの（たとえば他者の情動表出）、心理的効果を及ぼすもの（核の恐怖）、物理的刺激（ぬるま湯）があげられている。それに対して、「内から外へ」透過する存在には、感情や生理的分泌物があるとされる。そして、「透過的身体境界あるいは身体境界の透過性」とは、心理的や物理的刺激が「様々の影響に対して比較的容易に内外への移動を許す、そのような境界面

の強度の低さ」(p.175)である。このような定義を行なったうえで、著者は折口の論考や日常生活のエピソードや、そして逡空短歌のなかに透過的身体境界の標識を探っていく。

第5章では、透過的身体感覚は微小刺激への注意集中傾向と、身体感覚への執拗な関心から生じるとされる。続く第6章「折口叙景詩論と叙景の逡空短歌—透過的身体の癒しを求めて」では折口の叙景詩論を、叙景詩は旅における靈魂の危機を癒すと敷衍し、これは靈魂操作を鎮魂とした折口の説—すなわち、鎮魂呪術説—とは異なっているという指摘がなされる。そして、具体例を示しつつ、逡空の叙景短歌には情・景の融合、すなわち内界・外界の融合が示されるものがある—津城氏はそれを「瞑想的叙景短歌」と名付けている—とする。内界・外界の融合は、「水」的なるものによって外界の濃度が高まることによって起こるとされる。

第7章「聴覚的創造力と水的治癒力」では、内界・外界の融合の五感による契機のうち特に聴覚によるものが論じられる。分節する視覚に対し、耳を通じて音が「外から中へ」入って来る聴覚は、内外の融合を導きやすいとする。そして、バシュラールの拠って「水的なるもの」の治癒力を説き、テレンバッハを援用し外界の景観や音響が内界を支配する時に癒しがなされるとする。

以上のように第Ⅱ部は、折口鎮魂論および逡空短歌と身体感覚—何かが身体を出入りするという実感—の関係を示したものである。先に指摘したように、本書ならびに『行法論』で津城氏が用いている身体境界概念は、精神医学および臨床心理学から着想を得ている。しかし、いずれの著作もそれらの領域から単に術語を恣意的に借用して鎮魂行法の論者や折口に適用するといった類の小手先の作業とは無縁のものであるということをも指摘しておきたい。津城氏の独創的な概念である「透過的身体境界」によって、「不潔恐怖」(p.178)とされる折口の心理と学説および短歌の連関を論じるという作業は唯一無二であり、

魅力的であると同時に読者に多くの示唆を与えることは既にみてきたとおりである。津城氏が引くボイテンデイクのテレンバッハ評—「直感の深さと完璧さ」—(p.235)を借りるならば、第Ⅰ部では津城氏の「完璧さ」が示され、第Ⅱ部では「直感の深さ」が発揮されているといえよう。

がしかし、第Ⅱ部ではいくつか気になる点があった。津城氏自身、第Ⅱ部では「文章の走りをあえて押えなかった」(p.305)こと認めているが、逡空短歌解釈にことよせて自らを語っているのではあるまいかという思いを禁じ得なかった箇所があった。鶴岡賀男氏が、Ⅱ部では著者が肌をあらわすようだと言ったことが「あとがき」に記されているが(p.305)、評者にもそのように思われた。

また、第6章および第7章で内・外の融合を説く際の「水」的なるものについて論は、バシュラールの影響を受けてか詩的に過ぎはしないか。たとえば、次のような一節は感性的なあまり「水的な人間」(p.238)しか理解できないのではないか。

外界が「水」や「音」で充満してしまうことにより、乾いた外界が、いわば湿った内界と同程度にまで濃くなりまさり、その結果結合することになる。(p.209)  
この難解さが到達するのは、「水」的なるものの治癒力についての以下の結論である。

周囲を水的な雰囲気に取り囲まれた時の気分が根源的であり退行的・退嬰的であるのは、それが系統発生を遡る過程だからであろう。(p.239)

このような紋切り型の言節からは、治癒を引き起こすメカニズムは読み取れず、第Ⅰ部に示される細心の注意を払ったテキストの読み込みとのギャップを感じざるをえない。

### 3. 身体境界：「強化」と「無化」

津城氏のアプローチは画期的であり、全く新しい折口像を示した点は高く評価したい。しかし、独自の作業ゆえ問題があると思われる点も認められる。以下に2点を指摘してお

きたい。

(1)「透過的身体境界」の妥当性・整合性について

この問題についての論評は、境界の問題に明るい精神医学ないしは臨床心理学の専門家の手によって為されるべきであり、そうした場合にこそ生産的な論議が可能となると思われるが、ここでは評者の理解の範囲での疑問を示しておきたい。

折口信夫＝釈迦空に認められる、なにかが身体を出入りするという身体境界感覚を、(i)身体境界の透過性の操作(折口鎮魂論)と(ii)身体境界の無化(釈空の瞑想的叙景歌)に分けて論じた点は、斬新かつ説得的であり高く評価できる。その限りにおいて、身体境界は折口理解に妥当な分析概念といえよう。しかし、津城氏のオリジナルな概念である透過的身体境界の細部に関してはいささか混乱があるように思われる。津城氏は、以下のよう

千と一の名を持つ恐怖症は根を同じくするものであって、個体の統合性の不安、内外からの有形無形の侵入・漏出物に対する恐怖の、第一次症状群を成すものである。それを筆者の用語で言い換えれば、「健全」な状態では内外を確固として隔ててあるべき身体境界が透過的になっている、ということが出来る

(p.179)

身体境界が透過的であるとは、津城氏によれば「様々の影響に対して比較的容易に内外への移動を許す、そのような境界面の強度の低」(p.175)い状態である。津城氏が恐怖症をどのような意味で用いているかは判然としないうが、神経症の範疇に入ると考えてよいだろう<sup>(2)</sup>。であれば、必ずしも「身体境界が透過的になる」とは言えないのではないか。津城氏は、身体境界が透過的となる契機として、内向的および外向的感受性が先鋭化することによって必然的に身体境界の存在に向き合うことを挙げている(p.181)。だが、身体境界の存在を明確に意識することによって、必ずし

もそれが透過的になるとは言えない。例えば不潔恐怖で認められるように、身体境界へこだわることによって身体境界はむしろ強化されるのであって、分裂病のようにその崩壊には結びつかないと思われる。評者には、津城氏が「身体境界が透過的になることを恐れ、それにこだわること」と「身体境界が透過的であること」を混同しているように思われる。

それでは、このような混乱はどうして生じたのだろうか。評者の理解では、分裂病圏の論議を神経症圏にあてはめたからであろう。津城氏が内外融合を論じる際に援用するレンバウハの論<sup>(3)</sup>は、そもそも精神病(症状として「境界の崩壊」が認められる)を対象とした研究から生成したものであって、神経症圏(症状として「境界の強化」が認められる)にこれを当てはめるのは根本的に無理がある<sup>(4)</sup>。恐怖症患者は身体境界が「透過的」となることを恐れている、と考えるのが妥当であろう。

津城氏は、折口信夫の鎮魂説が身体境界の強化、一方釈迦空の瞑想的叙景短歌がその積極的な無化であるとし、「どちらも身体境界の透過性から生じ、その不安を癒す営み」(p.167)であると述べている。しかし、この「身体境界の透過性」は「身体境界が透過的になることへの恐れ」とされるべきであり、そうした場合にこの主張は説得的たり得よう。

(2)対象との距離について

ある表現者の営為をその心理と関連させて理解する学問として病跡学があるが、本書第Ⅱ部は病跡学的なアプローチを採っているとはいえよう。だが、そのような立場が一貫しているとはいえない。

透過的身体境界と並立する「繊細に過ぎて異常な体感」—津城氏によれば官能性と同義—は、自・他への二方向が考えられるが、津城氏は他者へ向かうものは「二次的な派生物」(p.185)であるとして、自らの身体へ向かうもののみを取り上げている。心理生理的な、あるいは病跡学的なアプローチをとるならば、他者への官能的関心、すなわち折口の同性愛

を射程に入れない(p.286注<40>)という態度は、片手落ちと言わざるを得ない。折口が、童貞でない者と一緒に風呂に入るのは嫌だといった旨記されているが(p.301)、これなどは異性との接触を不潔とする同性愛愛好者の身体境界へのこだわりが端的に示された挿話と思われる。

津城氏このような姿勢は、透過的身体境界の美化に由来すると思われる。次のような一節にそれを読み取るのは、穿った読みであろうか。

透過的傾向は、感覚的感受性が強いとされる型の人間に共通のものであり、いやしくも詩人と称されるものにして、この資質を欠くものはあるまい。その意味でも、折口はすぐれて詩人なのである。(p.185)

一方、津城氏は病跡学的な設問として、折口の身体意識の先鋭化の契機をさぐっている。そして、それを折口の眉根の大きな痣としているが(p.182)、傍証が示されておらず、説得力を欠くように思われる。

以上のように、津城氏の方法の細部には今後の精練を要すると思われる箇所が認められる。しかしながら、折口信夫・釈道空を同一の場で論じるという作業は画期的であり、身体境界への着眼は、津城氏の直感の冴えを示している。

津城氏は社会的なコンテクストは捨象しており、(その点が本書の弱点とも捉えられようが)そこに氏の美意識が感じられる。だが、津城氏は歴史的な観点から折口を論じる作業に取り組んでおられると聞き及んでいる。その成果が公にされる日を待ちつつ筆を措くことにしたい。

#### 注

(1) たとえば、鎌田東二氏は「東京大学には宗教現象を分類し類型化することで事足れりとする岸本宗教学以来の悪しき伝統がある」と述べた後に、宗教現象の分類は研究の第一歩であるとしている。

(『鎮魂行法論』に対する書評、「図書新聞」1990.7.14.)

- (2) 高良武久「恐怖症」『精神医学大事典』、講談社、1984、および宮本忠雄「自己臭症」『増補版精神医学事典』、弘文堂、1985、を参照のこと。
- (3) テレンバッハ(宮本・上田共訳)『味と雰囲気』、みすず書房、1980、Ⅲ 危機的変転の前触れとしての雰囲氣的なものの変化。
- (4) ここでは、境界概念を考える場合に極めて興味深い自己臭症や醜貌恐怖は除外して考える。